

『WISC-IV活用講座①②』報告

開催：平成27年6月13日(土)・7月4日(土) 2回連続講座



講師 京都教育大学 教育学部発達障害学科
教授 佐藤 克敏 氏

昨年度好評いただきましたWISC-IVの活用講座を、今年度も京都教育大学の佐藤克敏先生を講師にお迎えし、連続講座で開催しました。

今回は、事例検討や検査報告についての研修、グループ協議を行いました。小学校、中学校、高等学校、特別支援学校から、管理職、通級指導教室担当者、特別支援教育コーディネーターと大変幅広く御参加いただき、お互いに様々な意見を出し合うことができました。

WISCを解釈する際には、色々な情報を集めることが重要。それらの集めた情報を整理し、関連付けていく作業が必要。情報は、意図をもって集めていく。何と関連しているか予測していくことも必要。



(佐藤先生より)

両日とも参加者からケースを提供していただき、各校種別に5~6人のグループに分かれてじっくりとケース検討を行いました。

検査結果を解釈し、主訴に対しての支援策を考えていく際に、他にどういった情報が必要か、結果から見えてくることは何かなど、グループ内で検討し交流しました。

参加者全員で、様々な角度からその子ども像を考えていき、「本人の強み、弱みを活かした支援」例えば「ノートに補助線をいれる」「本人にとってわかりやすい言葉を使う」など具体的な支援策をたくさん出し合うことができました。

第2回では検査報告についての研修も行いました。報告書の作成側と報告を受ける側の立場から、普段疑問に感じていることや、お悩みなど意見を出していただきました。

【質問の一部】

Q: 検査結果を主訴に無理に結び付けようとしてしまいます。

A: 「主訴に対して検査結果からはわからなかった。」と伝えても良いのではないかと。こじつけないことも大切。

Q: 検査について知らない先生と、検査結果を共有する際にはどのように伝えたらよいか。

A: 普段の場面に合わせて、結果を入れて伝える方がイメージしやすい。本人のどのような姿と照らし合わせて伝えると理解してもらいやすいか考えて報告するとよい。



～アンケートより～

WISC-IVの結果からそれぞれどんな視点で子どもの力を見ていくのかを考え、その力を生かした指導の仕方考えることができました。自分ではなかなか分析できないですが、グループ討議のおかげで経験豊かな先生の考えなり分析なりを細かに聞くことができ、勉強になりました。(小学校)

検査の様子やその他の情報があって初めてWISCの読み取りができ、方策が考えられるということがよくわかりました。日頃WISC-IVのデータを基に通級のプログラムを考えたりしていますが、もっと保護者や学校の情報を得る努力が必要だと感じました。(中学校)

①子どものつまづいている箇所(能力)の予測を立て、②それはどんな検査や数値、質問をすれば明らかになるのか。この①②のポケットをどれだけ数多く持っているかが支援の方法を考えていく上で大切であることを明確に認識することができた。(中学校)